**2023（令和５）年度 京都大学 入試問題　文系　第２問　解答例**

問一
着実に自己変容の過程を進めていくうちに事柄の様相の捉え方が大きく変わるという、その過程自体により、以前分からなかったことが分かる心の状態を生じるということ。

問二
自然現象は、その運動を人間やコンピュータによって数学的に計算し、現実的な時間内で正確に解くことが困難なのに、安定した運動をすることが理解しがたく思われたから。

問三
人間の認知は身体と環境の間を行き交うプロセスであるから、判断や行為はすべて身体化された非記号的な認知として瞬時になされ、数学的思考も同様であるということ。

問四
芭蕉が、身体化された思考過程である境地の精度を上げ、時間や空間、自他の区別に拘泥せず、生きた自然の一片をそのまま迅速に把握し、五・七・五の句形に結実させることで。

問五
数学的思考は非記号的な身体化された認知であり、迅速な数学的発見のためには身体化された思考過程自体の精度を上げる必要があるので、数学研究は、自己の生涯において深い自己変容の過程を進めることに等しいということ。

Copyright 2024 - 現代文 まなびの礎 All Rights Reserved.　作成者　中野芳樹